

投稿

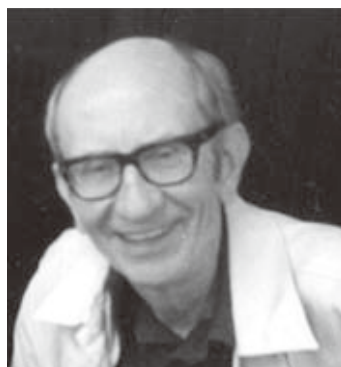
キルクソン教授と我が国の放射線の仲間たち

田ノ岡 宏

Tanooka Hiroshi

Rein Kilksn 教授を私たちはレインさんと呼んでいた。専門は生物物理であったが、故 岡田重文先生（東大放射線基礎医学講座教授，京大放射研教授など歴任），故 菅原努先生（京大放射能基礎医学講座教授，京大医学部長など歴任），近藤宗平先生（阪大放射線基礎医学講座名誉教授）をはじめとして，我が国の放射線生物研究者と生涯親交があった。レインさんが2011年10月に中国の南京で亡くなられ，遺言によって中国大陸に散骨されたということが，やっと今になって分かった。その生涯は波乱に満ちたもので，私たちの記憶にとどめたいと思い，この誌面に紹介させていただく。

レインさんはバルト海に面したエストニアの古都タルツに生まれた。父上は物理の教授で帝政ロシアに反抗して祖国を脱出し，途中シベリアを歩いたりしながら遂には日本まで辿りついたそうである。第二次世界大戦でタルツの町はドイツとソビエト（当時）の両方からの圧迫を受け，家族離れ離れになって市街を脱出し，夜空に町が燃え上がるのを船から眺めながら単身ドイツへ向かった。ドイツではゲッチンゲンの難民キャンプで終戦を迎え，その後アメリカへ渡った。名門エール大学を苦学しながら優等生で卒業し，当時放射線生物研究のメッカだったギブス研究所の院生となった。所長はポラード教授で，教授陣にはDNA修復研究の開祖セトロウやハッチンソンがおり，同僚の院生に



Rein Kilksn 教授

は後にセトロウ夫人になったジェーンやハナワルトがいた。レインさんは学位を取得するとすぐ助教授に抜擢されてウイルスのX線回折像の解析で活躍を始めた。このころ，岡田先生がエール大学に移られて，日本人として第1番目の友人となられた。その後，岡田先生がロチェスター大学へ戻られたのと入れ替わるように私はポストドクとして同じ研究所に入り，友情を引き継いだ。

当時のエール大学 Department of Molecular Biology and Biophysics は放射線生物学研究の盛んところで，標的理論に立ってDNAの構造を解明しようとしていた。J.D. ワトソンがインディアナ大学の院生としてファージにX線を照射してDNA標的断面積を決めようとしていたのも，この少し前のころである。研究室には

若いポストドクが大勢いて活気にあふれていた。医学部（エール大学では Medical School といわず Department of Human Science と名付けられていた）の放射線部門のハワードフランダーズ研究室とハッチンソン研究室との間では合同セミナーが毎週場所を交換しながら行われていた。また、トロント大学のラウス（現在 Int. J. Rad. Biol. 編集長）研究室との交流セミナーも国境を越えて毎夏行われていた。私と前後して伊藤隆 元 東大教授、山本和生 元 東北大教授もこの研究室に在籍された。レインさんは全寮制の1つであるモースカレッジの舎監を務め、舎監室に住み込んで、夜な夜な悩み事を持ち込んで来る学生の世話をしていた。日本で買ってきた下駄をはいてカラコロンと音をたてながらカレッジの石の廊下を歩き、日本製のギターを弾いていた。最初の旅行ですっかり日本を気に入り、私と付き合うようになった夏も、私の郷里 和歌山県田辺市に1人で行って、私の母をびっくりさせた。レインさんは研究場所をスウェーデンのカロリンスカ研究所に移してから更に業績を上げた。ウイルスの構造の対称性を元にして新しいウイルスの存在を予言し、それが見事に当たった時はレインさんの絶頂期であった。カロリンスカ研究所の生物物理部門の玄関にはレインさんのウイルス模型が飾られていた。ノーベル賞受賞とまでいかなかったが、ノーベル記念講演会には演者として招待された。しかし、このような名誉を決して表に出さず、気楽なおじさんの風貌でとおした。

アメリカのアリゾナ大学に移ってからも、毎夏決まったように来日した。岡田先生のおられた東大放射線基礎医学教室と菅原先生のおられた京大放射能基礎医学教室には必ず顔を出し、旅先ではいろんな人たちと友達になった。愛知県の女学生の一団と仲良くなり、彼女たちが結婚して母親になった後でも知多半島を訪ねて歓迎された。能登半島先端の民宿“さかや”も常番コースだった。レインさんを探して民宿に電話をすると、「2、3日ということまでどこかに出

掛けだが、そのうちまた戻ってきますよ」というような返事で、まるで“ふうてんの寅さん”のようだった。ある夏には菅原先生の紹介で徳島大学放射線科の河村文夫先生を訪ね、阿波踊り連に加えてもらって見事優勝した。アリゾナ大学のレインさんの教授室には、その時の関西テレビの優勝旗がでんと飾られていた。「阿波踊りは最高だ」とよく言っていた。

日本には思い入れがあって、独特の日本観を持っていた。自分は祖国を失って落ち着くところのない人生になったが、日本人同士には共同社会の連帯感 (togetherness) があるとよく言っていた。北海道でアイヌの話し言葉を聞いたが、全く耳に違和感がない。アイヌ語はエストニア語やその元になるフィンノウグリ語と関連している。その証拠に北欧のカレワラ神話の女神の名はアイノである等々尽きるところがない。日本女性と結婚したいと言っていたが、結局一生を独身で通した。

レインさんの日本訪問が30回目になった時、その記念パーティを銀座東急ホテルで開いた。参加者は旅先で知り合いになった方々、愛知県の犬伏さん、デパートの遊園で知り合いになった大野さん親子、毎年訪問で顔馴染みになった土産物店の老婦人、銀行の外貨担当の女性、学会関係では金沢大学の二階堂修教授（当時）、熊本大学の伊原博隆教授、現在放医研の酒井一夫センター長、現在奈良医大の森俊雄教授、と37名のにぎやかな会で東京都観光局からのお祝いのメッセージもいただいた。

レインさんは晩年、心筋梗塞を患って車椅子に頼りながらも旅行を続けられた。中国系の方に生活を助けられたこともあって、中国を訪ねるようになった。最期は南京で亡くなられたということであるが、その詳細は分からない。日本を愛し、日本に多くの友人のあったレインさんが旅先の中国で1人あの世へ行ったとはいかにも淋しい。今となってはレインさんの愉快だった思い出をかみしめるばかりである。

（元 国立がんセンター放射線研究部）